

氏 名	加 藤 龍 太 郎 かとう りゅう たろう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 92 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 6 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	口腔器管の体質学的研究 —歯牙ならびに顎と全身発育との関係、特に肋骨下角と下顎三角 の測定を中心として—
論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懐 教 授 美 濃 口 玄 教 授 岡 本 耕 造

論 文 内 容 の 要 旨

齲蝕状態ならびに顎骨の発育と体質学的因子との関係を幼年期、少年期、青年期・壮年期について調査し、つぎのような結果を得た。

1) 下顎三角は幼年期、少年期、青年期、壮年期で男女差はなかったが、各期の間では幼年期・少年期間に男女とも有意差を認めた。

2) 肋骨下角は幼年期、少年期、青年期には男女差はなかったが、壮年期では男性の方が角度が大きく有意差を認めた。各期の比較では幼年期・少年期間は男女とも角差はなかったが、少年期・青年期間には男女とも青年期の方が角度が広く、その間に有意差を認め、また青年期・壮年期間では、女性に変化を示さなかったが、男性は壮年期の方が角度が広く、青年期との間に有意差を認めた。

3) DMF 指数は幼年期、少年期、青年期には男女差がなかったが、壮年期では男性の方が健康度が高く、性差を認めた。各期の比較では、男女はその軌を全く一にし、幼年期・少年期間では、第2乳臼歯より第1大臼歯の健康度が高く、少年期・青年期間では青年期の第1大臼歯の健康度は低下し、その間に有意差を認めたが、青年期・壮年期間では壮年期が若干低下するが有意差を認めなかった。

4) 齲蝕率は幼年期、少年期、青年期では男女差はなかったが、壮年期では女性の齲蝕率が高く、男性との差は有意であった。各期の比較では、男女は全く軌を一にしており、幼年期・少年期間では乳歯期、混合歯期の特性を表わし、幼年期の齲蝕率が非常に高いのに比して少年期のそれは非常に低く、有意差を認め、少年期・青年期間でも青年期の齲蝕率は約2倍になり、有意差を現わし、青年期・壮年期間では、壮年期は増加の傾向を示しているが有意差を検定するには至らなかった。

5) 体重、身長は幼年期、少年期では男女差は表わさないが、青年期、壮年期ではいずれもの男性の数値が高く、性差は有意であった。

6) 下顎三角、肋骨下角、DMF 指数、齲蝕率、体重、身長の間での相関関係の結果は、幼年期、少年期、青年期、壮年期の各年代の相違、男女による違い、あるいはおのおのの母相関係数の信頼限界の値な

どからみて、一概に結論は出せないが大略次のような傾向が窺われた。

順相関を有すると思われたもの

身長—体重、下顎三角—肋骨下角、DMF 指数—下顎三角、DMF 指数—下顎三角、DMF 指数—
—肋骨下角、肋骨下角—体重、肋骨下角—身長、DMF 指数—体重、

逆相関を有すると思われたもの。

齲蝕率—体重、下顎三角—齲蝕率、肋骨下角—齲蝕率、DMF 指数—齲蝕率

論文審査の結果の要旨

口腔科学ないし歯科医学の領域において、もっとも頻繁に経験せられる疾患でありながら、しかもその確実なる本態が把握せられていないところのもの、それは歯牙齲蝕と歯槽膿漏であるということができる。事実この2疾患は古くから歯科学の中軸をなす重要疾患として、あらゆる角度から検討がつづけられているにもかかわらず、いまだにその原因はもとより、予防治療の面についても、暗中模索といっても過言ではない点があるのである。したがって、これらについては今日なおいろいろの角度から検討を必要とする状態がつづいているのであるが、著者はとくに歯牙齲蝕を主題としてとりあげ、これを体質学的観点から解明せんとしたのである。

そもそも齲蝕と体質との関係は歯科学上の重要課題をとく一つの鍵として古くから着目されているが、いまだ快刀乱麻を断つといったような決定的な結果は得られていない。そこで著者は今までこの方面であまりこころみられていない体質学的な指標として、とくに下顎三角、肋骨下角、DMF 指数などをとりいれ、これと歯牙齲蝕率、顎骨の発育状態などとの関係を幼年期、少年期、青年期、壮年期などの男女につき観察したのである。

その結果多くの新しい体質学的に興味のある成績が得られているが、下顎三角、肋骨下角、DMF 指数、齲蝕率、体重、身長などの相関関係のそれについては、幼年期、少年期、青年期、壮年期のそれぞれの年代差、また性別による相違など、さらにおのおの母相関係数の信頼限界の値などからしていちがいに結論はくたせぬが、齲蝕率が体重、下顎三角、肋骨三角、DMF 指数などごとくとく逆相関を示しているのは注目すべき興味ある成績と考える。

以上は今まであまり多く研究されていない口腔器官の体質学的研究分野に重要な知見を補遺するところのものがある。したがって本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。